

霊界論

序論

霊界という霊魂の世界は、人間の死後、霊魂が行って、とどまることができるところだ。または人間の精神作用が及ぶ範囲のことをいうこともある。ヘブル人への手紙 8 章 5 節では、地上にいることは天上にいることの「ひな形や影」だとしている。それゆえ主体である天上世界について知らずして人間を知ることはできず、宇宙万物の本質が明らかにされることも根本である主体を知るときに可能になるのである。私たちが霊魂について知ろうとするとき、肉体を通して知ることができるように、見えない世界を知るには逆に見える世界を通して知ることができる。

ヘブル人への手紙 8:5

「彼らは、天にある聖所のひな型と陰に仕えているものに過ぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとした時、御告げを受け、『山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい』と言われたのである」

※参考

霊界（無形界）：内なる人、心の世界、原因、主体

肉界（有形界）：外なる人、万物世界、結果未詳？

本論

1. 善霊界(Prison)

良心の律法が成されて救われる段階

ローマ人への手紙 5:13

「というのは、律法以前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪として認められないのである」

ローマ人への手紙 7:8

「しかるに、罪は戒めによって機会を捕え、わたしの内に働いて、あらゆるむさぼりを起こさせた。すなわち、律法がなかったら、罪は死んでいるのである」

善霊界は地上霊界（善霊界、陰府）の一部なので霊たちが閉じ込められる留置所だと言える。旧約（律法）時代には霊法を与えられていないので肉体だけを滅ぼし、霊は殺すことができなかった。（イエス様を信じない人間もこれに該当する霊は可能？）イエス様は十字架で亡くなられた後、霊的な御言葉を伝えるために、霊獄に行かれた。霊界における救いも御言葉と絶対的なイエス様信仰でのみ可能となる。

ペテロの第 1 の手紙 3:18-20

「キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なる方であるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし、肉においては殺されたが、霊に

おいては生かされたのである。こうして彼は獄に捕らわれている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされた。これらの霊というのは、むかしノアの方舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。その方舟に乗り込み、水を経て救われたのは、わずかに8名だけであった」。

2. 黄泉（陰府）(Hades)

地上の霊たち、不従順な霊たち、恨みを持った霊たち、肉体をもってすべきことができなかった霊たち、長寿を全うせずして死んだ霊たちが集まったところだ。

ルカによる福音書 16:17-31 ※死んだ乞食ラザロと金持ちの死後

「そして黄泉にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとその懐にいるラザロとがはるかに見えた」

マタイによる福音書 16:19

「私は、あなたに天国のカギを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」。

3. パラダイス（楽園）(Paradise)

パラダイス世界は十字架により生じた所なので、パラダイスに行くと、天国級の御言葉を学ぶ。

生きているときに、イエス様を信じていて死んだ人たちが行く所なので、信じた人たちが多く集まるに従って、天使も多く集まる。

ルカによる福音書 23:43

「イエスは言われた、『よく言うておくが、あなたは今日、私と一緒にパラダイスにいますであろう』」

4. 底知れぬところ(Abyss, Bottomless, Pit)

生きている時にイエス様を信じていたが、裏切った霊たちが行く所

へブル人への手紙 6:4-6

「いったん光を受けて天よりの賜物を味わい、聖霊に与るものとなり、また、神のよき御言葉と、来るべき世の力とを味わった者たちが、そののち墮落した場合には、またもや神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにするわけであるから、再び悔い改めに立ち帰ることは不可能である」

ヨハネの黙示録 20:1-3

「また私が見ていると、ひとりのみ使いが、底知れぬ所のカギと大きな鎖とを手を持って、天から降りてきた。彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経た蛇を捕えて千年の間つなぎおき、そして底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終わるまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらく

の間だけ解放されることになっていた」。

ヨハネの黙示録 17:8

「あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上がってきて、ついには滅びに至るものである。地に住む者のうち、世の初めからいのちの書に名を記されていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚き怪しむであろう」。

5. 天国(The Kingdom of Heaven)

愛、真理、善、光で成り立っている

ヨハネの黙示録 21:9-27

「最後の 7 つの災害が満ちている 7 つの鉢を持っていた 7 人のみ使いの一人が来て、私に語って言った。『さあ、来なさい。子羊の妻なる花嫁を見せよう』。このみ使いは、私を御霊に感じたまま、大きな高い山に連れて行き、聖都エルサレムが、神の栄光の内に神のみもとを出て天から下って来るのを見せてくれた。その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。それには大きな、高い城壁があつて、12 の門があり、それらの門には、12 のみ使いがおり、イスラエルの子らの 12 部族の名前が、それに書いてあつた。... 私は、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と子羊とが、その聖所なのである。都は日や月がそれを照らす必要がない。神の栄光が都を明るくし、子羊が都の明かりだからである。諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの光栄をそこに携えてくる。都の門は、終日、閉ざされることはない。そこには夜がないからである。人々は、諸国民の光栄とほまれとをそこに携えてくる。しかし、汚れた者や、忌むべきこと及び偽りを行う者は、その中に決して入れない。入れる者は、子羊のいのちの書に名を記されている者だけである。

6. 地獄(The Furnace of Fire)

マタイによる福音書 13:41-42

「人の子はその使いたちをつかわし、つまずきとなるものと不法を行う者とを、ことごとく御国からとり集めて、炉の火に投げ入れさせるであろう。そこでは泣き叫んだり、齒嚙みをしたりするであろう」

結論

以上のように、区分別に見た霊界も、結局、人間が肉体をもって生きている時に左右される。従って、生きている時にすべきことを必ず生きている時にすべきである。知っている分だけその世界（天国？）に行くことができる。それゆえ私たちは霊界について学んだ以上、100%知って、100%行かなければならない。また天国は私たちが分からないから成せないのであり、この地に地上天国がなされれば天上天国が成されるのだ。

マタイによる福音書 6:9-13

「だから、あなたがたはこう祈りなさい。天にいますわれらの父よ、み名があがめられますように。御国が来ますように。御心が天に行われるとおりに、地にも行われますように、、、」

※参考：救いの時代別次元

旧約	新約	成約
霊肉共にサタンが侵犯	肉だけサタンが侵犯	霊肉共にサタンは不可侵
第1次天国	第2次天国	第3次天国
律法	福音	新しい御言葉
肉界	魂界	霊界
地上天国	霊界天国	天上天国
有形天国	霊界天国	天上天国
霊形(?)級	生命級	生霊級